

復活節第3主日

2011/5/8

聖ルカによる福音書第24章13～35節
於：聖パウロ教会 司祭 山口千寿

私が前任の聖マーガレット教会に赴任したのは、1997年でしたが、その年は、マーガレット教会の創立50周年の記念の年でした。秋に記念礼拝や行事が行われましたが、それ以外にも記念行事の一環として聖地旅行をしようという提案があり、それから2年後に実施されました。参加者は当初の目論見よりずっと少なく、わずか8名だけでしたが、現地に行ってから参加者の希望を取り入れることができるような、小回りの利く楽しい旅でした。

その旅の終わりに近づいたある日、エマオを訪れました。今日の福音書に出てくる2人の弟子は、エルサレムから歩いてエマオに向かいましたが、わたしたちはバスに乗っての訪問でした。

実は、エマオの村が何処であったのか、はっきりと分かっていません。ここがエマオではないかと推測されている場所が、4箇所ほどあります。その1つはエマオの別名でアマウスと呼ばれており、旧約聖書続編にも登場する地名です(I マカバイ記3:40)。古くから知られていた村で、今はニコポリスと呼ばれているところです。

わたしたちは、初めそこにある修道院を訪れましたが、その日はたまたまイスラエルの休日に当たっており、修道院の門の扉が閉じられていて、中に入ることができませんでした。この場所は、エルサレムからは160スタディオン(約30キロ)も離れていて、福音書が明確に記している60スタディオン(約11キロ)という距離からは、かなりかけ離れていることとなります。それで同じ地名にも拘わらず、福音書のエマオとは異なる場所ではないかと考えられています。

休日であったことが、わたしたちには幸いでした。急遽、もう一つの、ここがエマオではないかと推測されている村に向かいました。そこは丘陵地帯にある村で、エルクベーブという地名です。今はアラブ人が住んでいます。ここは、エルサレムから丁度60スタディオ

ン離れた位置にありますし、昔はローマ街道が通っていたということですから、エマオの候補地としては、有力な場所ということになります。

この村に、クレオパの教会というフランシスコ会の美しい教会があります。聖堂の入口の上には、杖をもったイエスさまを中心に、2人の弟子が両側からイエスさまの言葉に聞き入っている彫刻が施されています。

この教会の裏庭で聖餐式を捧げることができました。親切な神父さんがロウソクとりネン(白い亜麻の布)を貸して下さり、それを使わせていただいて捧げたのです。昼間は暑いくらいのお天気でしたが、聖餐式を捧げたのは4時過ぎだったと思います。風が出てきて、かなり寒い中での聖餐式でした。しかし、このエマオと思われる地でもって、あの2人の弟子たちのようにみ言葉を聞き、聖餐に与れる幸いを感謝したのです。

さて、クレオパともう一人の弟子がイエスさまに期待していたことが何であったか、今日の福音書には明確に記されています。この2人だけではなかったでしょう。イエスさまに従っていた全ての弟子たちの期待でもあったでしょう。「わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放して下さると望みをかけていました」と語っています。ローマの支配からイスラエルを解放するのに十分な力とリーダーシップを備えた人物として期待したのです。昔、エジプトの奴隷であったイスラエルを解放することに成功したモーセのような預言者として、イエスさまを見ていたということです。イエスさまこそ、イスラエル民族の救い主となるはずでした。そこに期待を寄せたのです。

しかし、その期待は無残にも打ち砕かれました。それも、祭司長や議員たちという、イスラエルを代表する人々が、民衆の期待を実現するために協力するのではなくて、イエスさまを死刑にするために引き渡してしまうという、考えられないことをして人々の期待を潰してしまったのです。弟子たちにとってみれば、誰を信じて良いか分からないという状況が生じたということでしょう。

ところが、仲間の女性たちが、「イエスさまは生きておられる」と天使に告げられたという、これも驚くべき知らせをもって来ました。それでそのニュースが本当であるか、確かめるためにペトロが墓に走って中を覗いたところ、確かに遺体はなかったけれども、イエスさ

まに会うこともできなかつたという報告がなされたのでした。イエスさまの復活を確かめに墓に行ったのですが、墓は復活のイエスさまと出会う場所ではなかつたのです。復活のイエスさまと出会うことのできるどころは何処なのか。それが問題です。

2人の弟子は、エマオへ向かう道で、後から2人を追いかけてきたイエスさまに、ここ数日の間にエルサレムで起きた出来事を、このように話しました。自分たちが話している相手がイエスさまであることが分からないほどに、失意の中にあり、そして興奮しながら話したのでしょう。頭の中は大混乱を来していたことでしょう。

わたしたちは、何を期待して教会に来るのでしょうか。何を求めて神さまに近づこうとしているのでしょうか。どんな望みを抱きながらイエスさまの弟子になるのでしょうか。そして自分の願いや望みが打ち砕かれたときに、大きな失意を抱えて、この弟子たちのように、弟子たちの群れを離れて遠くへと去っていくのでしょうか。

イエスさまは、2人の弟子に聖書を説き明かすことをなさいました。聖書がイエスさまについて何を語っているか、旧約聖書が預言している救い主というのは、どのようなお方であるかを語られたのです。弟子たちの期待した救い主像を描いて見せたのではありません。弟子たちが抱いている望みを実現する方として、弟子たちの前に立たれたのでもありません。

わたしたちの日常生活というのは、自分の命をどのように維持していくかという関心のもとに成り立っています。子どもたちが学校に行つて学ぶことも、大人たちが仕事をして生活を豊かなものにしようとすることも、与えられた命を大事に生きたいと思うからです。命を粗末にするようなことがあつてはなりません。

しかし、そのことと自分の欲望の実現を図ろうとするとは別のことです。自分のことばかり考えて、周りの人を無視するような自己中心的な生き方へと転落していく危険性が、わたしたちの日常生活の中には、常にあることを覚えていなければなりません。自分の命を維持することにのみ、わたしたちの関心が向けられるようになると、この弟子たちのように、目が遮られてイエスさまのお姿が見えなくなつてしまいます。自分の願いを実現してくれる救い主を求めるようになるからです。

イエスさまが聖書を説き明かして教えられた救い主は、ご自身の命を差し出してくださいるメシアです。それはわたしたちが苦しみを受けるとき、共に宿ってくださるためです。わたしたちの中に来て、共にいてくださるためです。

エマオの村に着いて、なおも先に進んでいこうとされたイエスさまを、2人の弟子は、「一緒に泊まってください、夕方になって日も傾いていますから」と言って、引き留めました。もっと聖書の説き明かしを聞いたかったのかも知れませんが、心が燃えて、その炎を更に大きく、そして消えることのない炎にして貰いたかったに違いありません。

『主よ、ともに宿りませ』という有名な夕の礼拝の聖歌があります。聖歌集の31番です。後で奉献の際にご一緒に歌います。この聖歌はわたしたちの人生の暮れを重ね合わせて歌います。いつか迎えなければならない死の床にも、「主よ、ともに宿りませ」と祈ります。主がともにいてくださるから、死に直面しても命の炎が燃え続けることができる。炎が光となって死の闇を照らし続け、その光の中に憩うことが赦される。そのことを歌うのです。

食事の席で、イエスさまは一家の主であるかのように振る舞われました。5千人の人々にパンを分け与えたときのように(9:16)、そして、最後の晩餐の席上で12人の弟子たちにパンとぶどう酒を与えられたときと同じように(22:19)、パンを取って賛美の祈りを捧げ、それを裂いてお渡しになった。それは正しく主のお姿そのものです。その祈りの言葉と仕草に2人の目が開かれました。開かれたと同時に、イエスさまのお姿は消えて見えなくなりました。十字架の上で裂かれたイエスさまの体は、パンとなって弟子たちに食べられ、弟子たちの中に消え、溶け込んでいったのです。弟子たちに命を与えるためにです。

復活のイエスさまにまみえた2人の弟子は、直ちにエルサレムに取って返しました。自分たちの体験を報告して弟子たちの群れの中に戻るためです。復活の主を中心とした愛の交わりに結ばれるためです。新たな命の道を歩もうとする共同体が、そこに形成されていったのです。

初代の教会の人々は、聖餐を祝うたびに、そこに復活の主との出会いを経験しました。人々とともに宿ってくださるために、ご自身を与えてくださる主のお姿を見たのです。

わたしたちの祝う聖餐式も、同じ主が主宰してくださっています。ご自身の肉と血を与え、み言葉を語ってわたしたちの心を燃え立たせ、奮い起こしてくださいます。わたしたちもまた、初代の教会から連綿と祝われてきた聖餐に、同じ心であずかります。その時、パンを裂く主のお姿にまみえるのです。

わたしたちが、この礼拝の中に主のお姿を見ることができるよう、信仰の目が開かれることを祈り求めたいと思います。